

「汚れた霊が戻って来る」というおぞましい小標題が掲げられます。たいへん短い箇所なのですが、38-42節に続いてファリサイ派とイスラエル、もちろんその中には自分たち初代教会をも含めて、しるしを求めるが悔い改めないという批判が綴られてゆきます。

本日の箇所には「汚れた霊」を擬人化して登場させます。43節で「人から出てゆく」と記されているのは「追い出された」という意味です。これは類似箇所のルカ11;24-26が「ベルゼブル論争」(ルカ11;14-23)のすぐ後に置かれているという文脈から理解出来ます。マタイもルカも共にQ資料からこの記事を手しましたが、マタイはこれを「ベルゼブル論争」(マタイ12;22-32)の文脈には加えず、38節から始まるファリサイ派との対決についての文脈に編集し直しています。これは汚れた霊は戻ってくるという、その性質を表現するだけの箇所を、文脈を移すだけで敵対者への批判の度合いを強めるという手法です。

マタイが福音書を記した紀元80年頃とは、ローマの管轄の下に道路等の交易路は格段に整備され、砂漠においてもオアシスの確保等が完備された環境でした。遊牧民としてのイスラエルはもはや旧約聖書の昔語りでしかありませんでした。しかし、それゆえ砂漠、つまり荒野に対する憧憬と怖れが渾然一体となって人々を取り囲んでいたようです。公道を少しでもはずれるとそこは死の世界でした。イエスの「給食物語」も荒野に踏み込むと食べ物が無いということが発端となっています。22節以下の「悪霊の頭ベルゼブル」というのもラビ文書によると実は巨大なハエの姿をしているそうです。ハエは死肉に群がる文字通り死の象徴でした。

さて、物語は悪霊払いをしていたファリサイ派にもよく理解出来るように、悪霊の追い出しが描かれます。これは追い出しであって滅ぼしではありません。ですから、やっぱり戻って来るといいます。戻る「家」とはイスラエルです。イエスの福音を聴いても悔い改めないイスラエルをマタイは追求します。そして、悪霊とは、人間と関係を持つがゆえに悪霊なのですが、仲間を連れて再び戻り、その結果として前より悪くなると警告します。イエスの言葉を聞き、その活動を見たにもかかわらず、悔い改めてイエスを迎え入れることがないので、かえって前より悪くなるとマタイは描きます。

わたしたちは再び過ちを繰り返さないなどということが出来るのでしょうか。それは不可能です。それではマタイはそのような無理難題を要求しているのでしょうか。そうではないのです。わたしたちは自分に固執し、自分を中心に生きてゆくのごく自然なこととして考えます。けれども、聖書の問いかけとは、自分の手中に自分の運命を握り得ない被造性への問いなのです。つまり、命を自分勝手にもてあそぶのではなく、与えられたものとして捉え直すということなのです。このことが生きねばならない一番深い現実であることを思えば、自分に固執し中心とする生き方は不徹底な生き方といわねばなりません。そんなわたしたちに、もし自分を手放して生きるものがあれば自分自身が不思議に思えることでしょう。イエスの奇跡(行動)が与える不思議さはこれなのです。それは合理性で説明できない不思議さではなく、鮮やかな自己放棄となった被造性への徹底です。マタイの求めはここにあります。